

横穴式石室からみた

中原4号墳の被葬者像

藤村 翔

横穴式石室の特徴と築造工程

中原4号墳の埋葬施設は、全長5.6m、奥壁幅1.0m、開口部幅1.0mの無袖形横穴式石室であり、地下式となる構造から、竪穴系横口式石室とも呼ばれる。

石室の構築手順としては、始めに深い長方形の墓坑を掘り、その内部に落とし込むように壁面の石材が3段階で積まれる。石材には近接する伝法沢川周辺で採取された河原石が利用され、裏込めには礫と土が併用された。この石室を特徴づける開口部の石積み（段構造）は、壁面の石材とかみ合わせて最下段が初期段階に配されている。壁面上部は新たに拡張された上段墓坑内に収まるように1～2段階で積まれた後、天井石が架構され、それを覆う程度に墳丘盛土がなされる。埋葬時には開口部が墓道状に掘り返され、石室内への埋葬や副葬品の配置が完了した後、段構造の上段部分が壁状に仕上げられ、さらに塊石による閉塞がおこなわれたと考えられる。

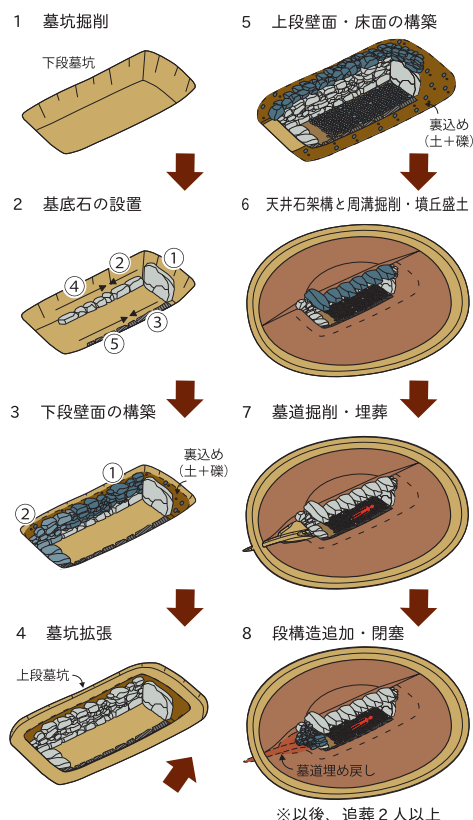


図1 中原4号墳の構築過程

遠江～駿河中部地域の横穴式石室が地上式で、羨道から玄室までが平らな場合が多いことを鑑みると、墓室が地下に築かれる中原4号墳の石室はやや異質な印象を受けるかもしれない。ただ、横穴系埋葬の本場である中国や朝鮮半島では墓室が地下に築かれることが主流であり、それは「黄泉の国」が地下世界に広がっているとする考え方に基づく。その点においては、中原4号墳のような石室は本来の思想に忠実であり、渡来人に関連する可能性のある石室構造ということもできるだろう。また、石室が地下にあるため、上部を被覆する墳丘盛土の総量は少なく済む。併せて壁面の石材や天井石架構の際の作業高は低くなり、石室構築の際の労力は総じて低くおさえることができたとみられる。省エネ・省コスト化を果たしたこの種の石室は、上位権力によって古墳の規模や築造コストに関する規制が働いた結果とみられることもできるかもしれない。

駿河東部地域のなかの中原4号墳

中原4号墳は、伝法沢川の周辺とその東側の低丘陵部に6世紀後葉から8世紀初頭にかけて広く展開する伝法古墳群内の一基として捉えられ、現状ではその中でもいち早く横穴式石室を採用した古墳である。また駿河東部地域の範囲でみても、最初期の横穴式石室としての地位は揺るがず、7世紀以後も中原4号墳と共通する無袖形の平面形態や開口部に段構造を有した石室が広く築かれた点を鑑みれば、その後の地域集団の墓制にも大きな影響を与えた古墳と評価できる。ポスト中原4号墳世代である7世紀初頭前後には、石室全長が8～11m程度的大型石室と4～6m程度の中型石室に分化し、駿河東部地域のそれぞれの古墳群において大型石室をトップとする階層序列が完成する。大型石室には各集団の指導者層が葬られたと考えられるが、駿河東部地域全体を統べるような首長は現れず、各集団が駿河中部地域や甲斐地域の大首長層などを介して、ヤマト王権の管理下におかれていたとみられる。さらに一古墳群内に多様な形式の装飾付大刀や優位の副葬品目が分散し、それらが中型石室からも多く出土する点を考慮すれば、各集団単位のみならず、個人レベルでもヤマト王権を構成する有力氏族や地域の大首長層と直接関わり、その恩恵を受けた可能性も想定される。

無袖石室の列島の展開と中原4号墳

中原4号墳が築かれた6世紀後葉という時期は、ヤマト王権が主導した、横穴式石室の形態と規模によって表現される階層秩序の整備が、飛躍的に前進する時期である。無袖石室や竪穴系横口式石室は、一般的には下位階層の墓制と考えられるが、当該期に整備された階層システムに組み込まれることで、列島の広範囲に展開したことが推定される。特に中原4号墳と共通する有段の無袖石室（竪穴系横口式石室）は、伊予や伯耆、大和などの西日本諸地域や朝鮮半島南東部のほか、三河や相模、武蔵、下野といった東海～東日本諸地域にも類例が分布しており、先の思想的側面も含め、渡来人と関わる埋葬施設の特徴であった可能性がある。東日本諸地域においては、5世紀～6世紀前半までに積石塚の古墳群が形成された古東山道ルートとその周辺を軸に、6世紀後半にはそのルートの延長や補完を目的とするような太平洋沿岸の要衝に有段の無袖石室が築かれた状況が看取される。

また、無袖石室が地域内最上位層の古墳に採用された駿河東部、信濃南部、上総の諸地域は、交通上の要衝である点も共通している。各地の無袖石室を築いた集団には馬の生産や鉄器製作を担った渡来系の技術者も含まれ

た可能性が指摘されているが、首長墓級の無袖石室被葬者層はそのような技術者たちを統括する一方で、交通路を掌握することで彼らの作った製品の流通を管理する働きも担っていた可能性もある。

まとめ

中原4号墳は、大陸伝来の新しいスタイルの埋葬施設であった横穴式石室を駿河東部地域ではいち早く採用した、非常に先進的な古墳である。類似した石室が朝鮮半島から列島各地へと広がった点からは、ヤマト王権によって各種手工業に関わる渡来系技術者やその管理者が再編され、列島各地へと派遣された状況が推定される。中原4号墳の被葬者も、そうした任務を担って駿河東部地域へ赴いた指導者の一人と考えられよう。石室の諸特徴は7世紀の駿河東部地域の古墳にも広く受け継がれ、各集団からは石室は中型でも、中原4号墳のように目を引く副葬品を有した人物が数多く輩出された。中原4号墳の被葬者は、その後の地域社会の発展を方向づけた英雄として、後世まで語り継がれるような人物であったのかもしれない。

※参考文献等は『伝法 中原古墳群』筆者考察を参照。

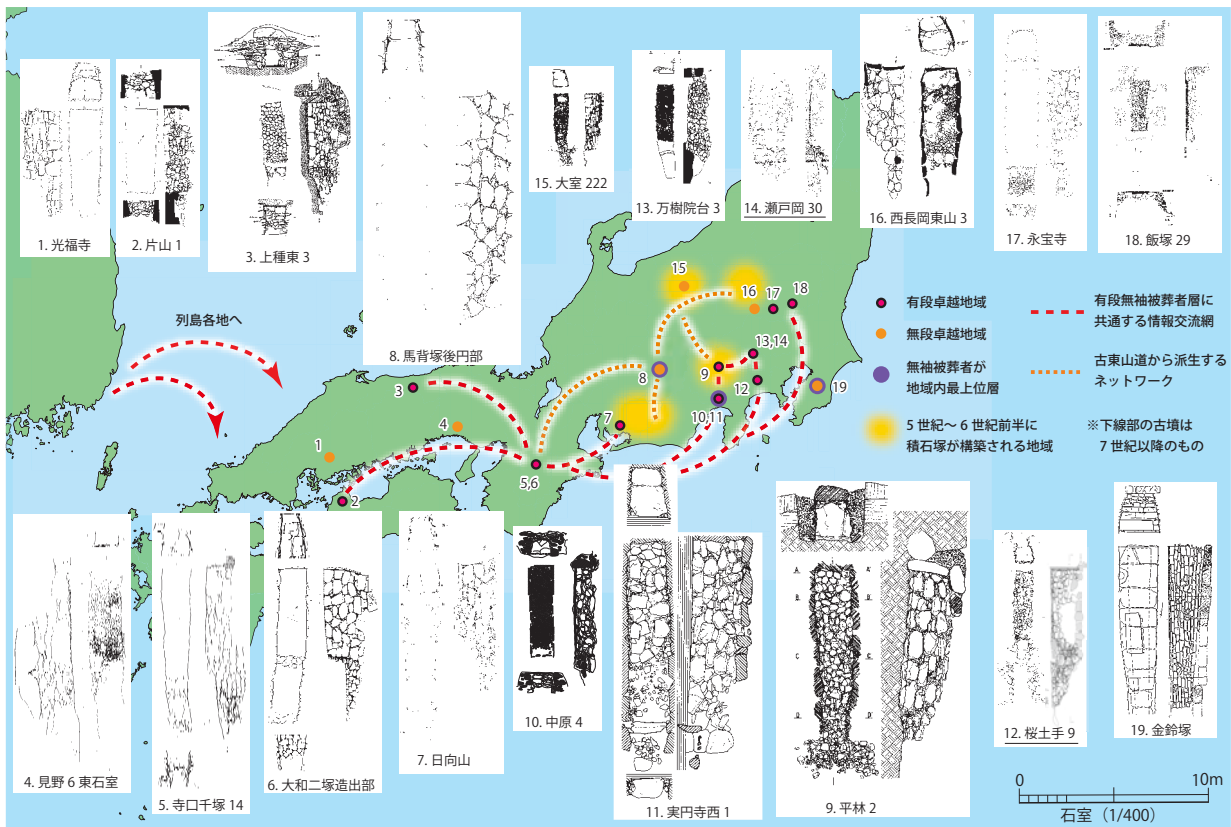


図2 6世紀後葉を中心とした無袖石室の展開

中原 4 号墳の埋葬と儀礼



中原 4 号墳の石室内では、埋葬された人体や布、木材は腐り、土の中でほとんど消失していました。しかし、若干の痕跡は認められています。また、ガラス製や土製の玉、多くの金属製品や土器が、後世の盗掘や攪乱が少ない状態で出土しています。そこで、発掘調査の詳細な記録をもとに、石室内で行われた埋葬とそれに伴う儀礼などについて復元してみました。

埋葬主体の復元 まず、埋葬主体（埋葬された被葬者）の配置を復元してみましょう。棺や人体はほとんど残っていませんでしたが、粉状になった骨や歯、装身具であったと判断できる玉類の分布、かたわらに置かれたであろう刀剣の配置から検討することができます。

検討の結果、石室の奥半部と前半部の両方に埋葬主体の存在が確認できます。さらに、奥半部では 2 体が頭を逆方向（逆頭位）にして、一部重複するように隣接していたと復元できます。副葬品の編年的位置から、頭を奥に向けた埋葬①は 6 世紀後葉の初葬（最初の埋葬）、頭を前に向けた埋葬②は 6 世紀末葉頃の追葬に位置づけることができます。

石室前半部の埋葬主体（埋葬③）については、頭位などの判断は難しいですが、石室内への出入りを邪魔する

場所にあり、散在する副葬品（鉄鏃や土器片）の上に埋葬主体の骨片があることから、奥半部の埋葬よりも新しい段階のものと考えられます。

副葬の様相 副葬品の多くは、埋葬①・②に伴うものと判断できます。それぞれの埋葬主体のかたわらには刀剣が置かれ、その他にも鉄鏃や馬具、農工具、土器などが多く副葬されています。詳細にみると、石室の奥半部と前半部とでは、副葬品の種類や土器の器種に違いがあることもわかります。

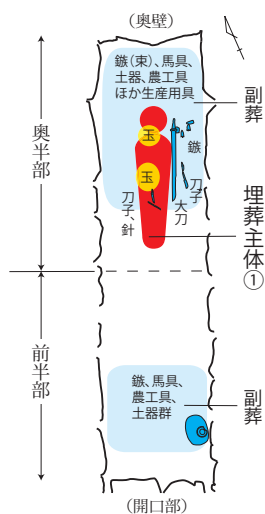
一方、新しい段階の埋葬③には副葬品がほとんどなく、埋葬①・②との埋葬方法や被葬者像の違いを推測することができます。

片づけと儀礼行為 石室の奥壁寄りでは、多くの鉄製品が集積された状態で出土していました。これらは埋葬①の副葬品であると判断でき、埋葬②に際して奥壁寄りに片づけられたものと考えられます。

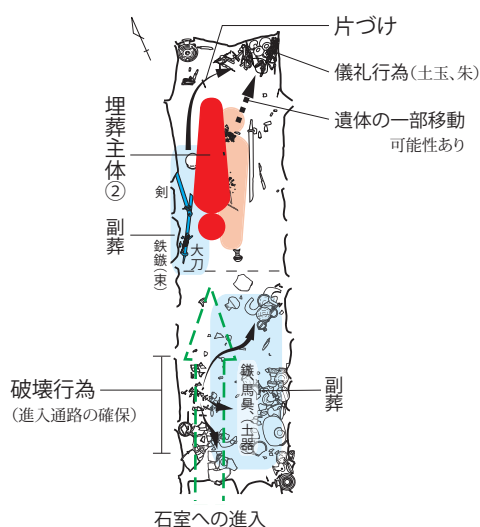
さらに、ここには埋葬主体に伴う装身具とは異なる土玉が出土しており、儀礼的に土玉を用いた可能性が考えられます。また、歯の可能性のある小片が出土したという記録もあります。埋葬主体の場所に大きな乱れはありませんが、遺体の一部を移動した可能性は考えられます。

副葬品の破壊行為 石室の前半部では、鉄鏃や土器などが大きく破壊され、周囲に敷き寄せられた状況を把握することができます。土器片の分布状況などをみると、埋葬③の位置にあった副葬品が対象になっていることがわかります。したがって、埋葬③に伴う片づけであった

【埋葬①】初葬（6 世紀後葉）



【埋葬②】追葬（6 世紀末葉頃）



【埋葬③】最終埋葬（7 世紀代）

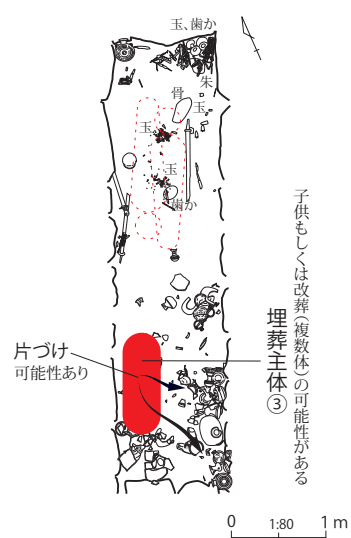


図 1 中原 4 号墳の埋葬等の復元

